

## 中央アジアのタタール人

—第2章 トルキスタンにおけるタタールの新方式教育の  
発展と地域のムスリムへの影響(19世紀末から20世紀初頭)—

リナット・シガブディノフ (著)

高橋 巖根 (訳)

アメリカ南北戦争(1861~65年)により南部綿のヨーロッパ市場への出荷が停止されて繊維業界が危機に陥ると、綿花の供給源である中央アジアのロシアによる征服は重要な意味をもつようになった<sup>1)</sup>。

1865年5月17日にはタシケントが、翌66年にはブハラ・ハン国のフジャンド、ウラテュベ [訳注: 現イシュタラフシャン], ジザクの各都市が、1868年5月2日にはサマルカンドが陥落した。

このようにして、1864年から1868年にかけてブハラとコーカンドの二つのハン国が征服された(両国は形式的には依然独立を保った [訳注: 両国はロシアの保護国とされた])。中央アジアの征服地には、タシケントを中心とするトルキスタン地方が形成された。トルキスタン地方は、シルダリヤ、フェルガナ、サマルカンド、セミレチエ、ザカスピの5州に分けられた(ただし、後二者は19世紀末になってから加えられたものである)。ザカスピ州を除く各州は軍事総督が統治した(ザカスピ州には州長官がいた)<sup>2)</sup>。

トルキスタン地方、この帝政ロシアの新しいムスリム植民地は、原料の供給地、そして生活用品の市場として宿命づけられた。したがって、先住民に対する文化政策においては、ロシア語の初歩的な知識の修得で十分とされたのだった。1900年にはフェルガナ州の軍事総督が、「先住民の若者に対するヨーロッパ式の教育については、総合科中等学校ひとつあれば何ら支障なく達成することができ、そこでの教育は地域の実用的な必要性にのみ答えるべきであり、せいぜい都市部にある専門学校の上級クラス程度のロシア語等の知識が得られれば十分である」<sup>3)</sup>。

ここに言う総合科中等学校、つまり、いわゆるロシア式先住民学校とは何か? 帝政ロシア当局は、この学校の最も重要な目的は、そこで学ぶ学生がロシア語の生きた会話が

できるようになることだと考えていた。そこではロシア語と算数が教えられていて、教授用語はロシア語であり、生徒たちは常にロシア人教師の監督下にあった。先住民の啓蒙にあたってロシア当局が何よりも心を砕いたのは、「どのようにして先住民に彼らの言語でできるだけ少ない情報を与え、それにより地域の文芸や文化伝統が強まることを防ぎ、ロシア化によって地域の文化を消滅させるか」であった<sup>4)</sup>。当然ながら、このような教育の効果は限られていた。有名な宣教師のニコライ・ボブロフニコフは、先進文化を普及させるというロシア式先住民学校の役割は無意味であり、「サルト〔訳注：中央アジアの定住民〕の文化伝統の復興は、タタールの影響下で始まったのである」と書いている<sup>5)</sup>。

タタール人は長くトルキスタン地方と貿易・文化関係を有してきたが、宗教が同じで言語が近いため〔訳注：ともに宗教はイスラームで、言語はテュルク系〕、現地住民に近い存在であった。トルキスタンに來住したタタール人は、この地方の同じムスリムたちを進歩思想に親しませようとした。地域の民族学校と定期出版の発展やウズベクやカザフの知識人の養成におけるタタール知識人の役割を過小評価することは難しい。とりわけ多くのタタール知識人は教師であった。「ノーヴォエ・ヴレーミャ」紙は1910年に、トルキスタンでは「先住民学校の数もムスリム師弟に対する教育法も」不明だが、「この忘れられた地域では毎年十万を下らない数の子弟が、なかなづくカザン・タタール人のもとで学んでいる」と報じている<sup>6)</sup>。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、目覚めつつあるロシアのムスリム世界には発展しゆく資本主義に関連する新思想が浸透していた。そこでの喫緊の課題は、貿易業界、そしてそれ以上に産業界を指導しうる地域出身の人材の養成であった。人材養成の必要性とは、何よりも教育の問題であった。最も望ましい選択肢は、マドラサやマクタブ〔訳注：ともにイスラームの宗教学校、マドラサが高等教育を、マクタブが初等教育を担う〕に宗教教育を任せ、独立した世俗の学校を開くことであった。しかしながら帝政政府はタタール人に世俗学校の開校を認めず、非公式に開校した教育施設もいずれは地域行政によって閉鎖されるのが常であった。そのため、こうした状況下での最適解はマドラサやマクタブの改革ということになる。改革の要点は、「マドラサの授業にタタール語による初等の総合的な科学教育（地理・歴史・自然科学・算数と測量術、教育学と法学の概論）を導入すること」であった。「マドラサで教育人材の養成がかなうならば、マクタブの授業を時代の要請に応えるものにできるかもしれない」と、ガスプリンスキーは書いている<sup>7)</sup>。進歩的な発音理論に基づいて行われる新方式学校の使命は、ロシアのすべてのテュルク系民族に、母語であり伝統的なアラビア語の語法を排しあらゆる階層が使うことのできる日常会話に近い言葉による世俗教育を与えることであった。

トルキスタン地方における新方式学校の創設者は「圧倒的にロシア本土から來たタタール人であり、このような学校の大半において彼らが教師を務めていた」と、バリト

ルドは書いている。トルキスタンにおけるタタールの新方式のマクタブの出現は、彼によると、「実はロシア式先住民学校が最も顕著に増えたあの十年と関連している」。すなわち、1896年には28であったものが、1906年には83に増えた（その後、1911年にはその数は89に達した）。タシケントでは1910年にロシア式先住民学校が8であったのに対して、新方式のマクタブは16であった（男子マクタブは全部で137あったから、新方式のマクタブは全体の11.7%を占めたことになる）。コーカンドでは1911年に、ロシア式先住民学校2校で162名の生徒が学んでいたのに対して、新方式のマクタブ8校には530名の生徒がいた。バリトルドは、このような対照的な統計データに言及しながら、タシケントの新方式学校が20校でコーカンドでは16校であったとする国会議員マクスードフのデータ（1910年10月15日付けの「トルキスタン」紙に掲載）とこれを比較している<sup>8)</sup>。グバエヴァによると、1908年にフェルガナ州で1306名が学んでいた新方式学校30校に関する情報が公式に登録されているとのことだが、同じ年にアンディジャン市一箇所だけで18校あったことを考慮に入れると、これはかなり低く見積もられた数字だと言える<sup>9)</sup> [訳注：フェルガナ州には、アンディジャン市以外にも、コーカンド市など比較的大きな都市がいくつかある]。ボブロフニコフは、トルキスタンにおけるムスリム学校の正確な数は不明だとしながら、1911年1月1日付けの国民教育省の報告ではロシア全土にマクタブ1万3校、マドラサ1085校があり、トルキスタン地方3州（全5州のうち3州のみのデータ）ではムスリム学校6331校（うちマクタブ6003校、マドラサ328校）を数えた、としている<sup>10)</sup>。

バリトルドは、帝政政府にとってはムスリム文化は絶滅寸前であるように見え、またそうした運命がふさわしいと思われていた、と指摘している。しかし「現実はこの見方を裏切った。トルキスタンに來住したヴォルガ・タタールの目の前には、現代的水準を満たしながら民族的・宗教的土台を損なうことのないムスリム学校の改革に関する、まさにお詠え向きの思想的土壌が待っていた」<sup>11)</sup>。この点にこそ、ロシア式先住民学校とタタールの新方式学校の根本的違いがあるのだ。

周知のように、ムスリム学校の基本的な財源は、その目的のために集められたワクフ（不動産や商売の売上などの収入）であった。しかし、バリトルドによると、トルキスタン地方の創設者であるフォン・カウフマン [訳注：初代トルキスタン総督] は、ムスリムの組織や教育関係を含む関連施設を制度的に無視することに決め込んだ。彼は「1867年の臨時決定の文言に反して、新たなワクフの寄附の容認を退けた」。したがって、教育施設はおそらく以前のワクフの全てを確保することができず、「タシケント近郊のチェルニャーエフの辺りでは、タシケントのマドラサのためのワクフの解除とロシアの慈善団体への引き渡しが行われたことがあった」<sup>12)</sup>。にも関わらず、ワクフの差押えは広く見られた訳ではなかった。「ワクフが押さえられたのはロシアの行政組織の運営のためであり、それはすでに1870年代から見られたことであった。行政は概ね、ワクフと

その管理に関わる場合にのみマドラサに干渉したようである。教育そのものに積極的に介入したことはなかった<sup>13)</sup>。

(ロシア第一革命が起き) 1905年10月17日に十月宣言が採択されると、先住民学校も国民教育省からロシア学校同様の扱いを受けて然るべきという見解が強くなった。そこでこの目的のために、ムスリム学校への調査官職の導入が提案された。例えばボブロフニコフによると、タシケントでは学区を導入し、学区ごとに調査官が置かれる(市内では計4名)ことが必要であり、彼らは上位の地区調査官のもとで「研究教育上の職務」を果たすことが求められた<sup>14)</sup>。しかし、バルトリドによると、実際には、「求められていることの基本的な意味、周到な計画やそれに基づく実行といったことに関心のない者たちによるマドラサやそのワクフの運営に関する干渉により、すべてに制約があった<sup>15)</sup>。

ワクフの横領を防止するために、1894年に「トルキスタン地方先住民マドラサの上級教師への指令」が採択されたが、その3節の規定では下級教師・ワクフ会計官・地区聖職者(ムッラー)は上級教師の指示に従うものとされた。バルトリドによると、「これはすなわち、組織の経営を教師たちから独立してワクフ会計官のみが行ってきた古いしきたりの廃止を意味するものであった<sup>16)</sup>。だがこの指令によりワクフの横領が止むことはなく、ムスリム学校の経済的弱体化は続いた。このことに関して、ボブロフニコフはサマルカンド州のマドラサのきわめて惨めな状況について「ワクフは差し押さえられている」と述べている<sup>17)</sup>。

トルキスタン地方のムスリム学校は、裕福な保護者による善意の寄附のおかげで何とか存続した。例えば、セミレチエ州にあった国民学校の調査官が、1913年に書いたトルキスタンの学校主任調査官に対する報告によると、ヴェールヌイ市〔訳注：現アルマトゥ〕では「6年制のタタール男子マクタブが1883年から存在し1904年に新方式に変わったが、この学校は善意の寄付に支えられていて、その多くがガブドゥルヴァリエフと息子たちの貿易商社から出されている。寄付金は、マクタブの経営を担当したマルムイシュ郡ヴァトカ県の農民ゼイニットディン・タゼトディノフの代理人に宛てられていた」。同報告ではさらに、同市にはタゼトディノフを管財人としてガブドゥルヴァリエフ商会の名を冠した新方式の6年制女子校も存在した(こちらも1883年創立で、1904年に新方式に改組された)としている。いわく「教学面を率いたのは、上級指導者で公定ムッラーの妻であったガリファ・ダヴレカモヴァであった。彼女はカザン県出身で、カザンの教区マドラサで学んだ人である。ロシア語ができ、読み書きができた<sup>18)</sup>。

タタールの新方式学校には、統一された教育プログラムはなかった。例えば、上記のヴェールヌイ市の新方式男子校では、教育課程には次のような科目が含まれていた：①イスラーム関連の読み書き、②算数、③宗教、④地理、⑤預言者ムハンマドにまつわる歴史、⑥アラビア語、⑦初等物理学、⑧絵画、⑨預言者たちの歴史、⑩自然史。絵画

を除く各科目は、同市の女子学校でも学ばれていた。セミレチエ州カパル市〔訳注：現カパル村〕の新方式男子校で学ばれていたのは、①タタール語、②宗教、③算数、④絵画、⑤預言者とイスラームの歴史、⑥タタールの歴史、⑦博物学であった。同市の新方式女子校では、①タタール語、②宗教、③算数、④タタールの歴史、⑤地理。同じ場所の初等女子校では、タタールのアルファベットや読み書きが学ばれていた。ピシュペク市〔訳注：現ピシュケク〕のタタールモスクに併設されていた新方式男子マドラサでは、①イスラーム関連の読み書き、②算数、③宗教、④地理、⑤イスラームの歴史、⑥測量術、⑦聖書に見る歴史、⑧自然史、⑨アラビア語。ボリショイ・トクマク村のタタールモスク付属の新方式男子マドラサ「エクバル」では、①イスラーム関連の読み書き、②算数、③宗教、④地理、⑤イスラームの歴史、⑥解剖学、⑦アラビア語、⑧初歩の学問、⑨裁縫。プルジェヴァルスク〔訳注：現カラコル〕のタタールモスク付属新方式男子校では、①イスラーム関連の読み書き、②宗教、③歴史、④地理、⑤算数が教えられていた<sup>19)</sup>。

このように、男子校・女子校に共通して教えられていたのは、宗教、算数、イスラーム関連の読み書き、ないしタタール語、イスラームの歴史、預言者たちの歴史、預言者ムハンマドにまつわる歴史、アラビア語であり、残りの科目はすべての学校で教えられた訳ではない。地理や初等物理学、自然史が教えられたところもあれば、解剖学、測量術、博物学が教えられたところもあった。

タタール学校で使われた教科書は、オレンブルク、ウファ、カザンで出版されたものであった。例えば、N. ドゥマヴィ、『読本』、オレンブルク、1913年。アフマロフ、『テュルク語の朗読』、カザン、1911年。Kh. イスカンデロフ、『教育学』、ウファ、1913年。ファイジ、『科学の読み物』、カザン、1912年。カリモフ、『預言者たちの歴史』、オレンブルク、1912年。『クルアーン』（出版年・出版地はさまざま）。マクスドフ、『斎戒』、カザン、1911年。カリモフ、『イスラームの歴史』、オレンブルク、1912年。ヴァリシェフ、『算数』、カザン、1910年。スレイマノフ、『自然史』、カザン、1912年。サヴァン、『アラビア語によるクルアーンや他の聖典の朗読法』、カザン、1910年。ファイズリン訳、『物理学』、カザン、1910年。スレイマノフ、『解剖学』、カザン、1911年。G. バツタル、『タタールの歴史』、カザン、1912年。等々<sup>20)</sup>。

トルキスタンでタタール学校の教師となったのは、ロシア中央部のさまざまな地区の出身で、カザン、ウファ、トロイツクやオレンブルクで教育を受けた者たちであった。トロイツクで教育を受けた者としては、ガブドゥラフマン・サグディエフ（ウファ郡出身のティプタル）、シャキルジャン・ヤクポフ（ウファ郡出身）、ガブドゥラヒム・イマシェフ（ペルミ郡出身のバシユキール人）がいる。ウファで教育を受けた者としては、ヤクブ・ガリエヴィチ・アイマノフ（マドラサ「ガリヤ」を修了）がいるが、同じマドラサの修了者には、ガビドゥラ・ザキロヴィチ・ハリトフ、ザファル・シヤラ

フトディノヴィチ・バシロフ、ヘグマトウツラ・サイドウツロヴィチ・ムルタジンらがいる。ウファのマクタブ修了者には、マリヤム・ヤクボヴァ、ムフタラム・サガディエヴァ、ファティマ・イシャングリディナ。オレンブルクのフシノフ・マドラサではラトッフ・サドゥコヴィチ・ファイゾフが、カザンのアパナエフ・マドラサではアブドゥルガジズ・ムサガリエフが、ムハンマディア・マドラサではサリフ・ムフタフェトディノヴィチ・ナドゥルシンが、教区のマドラサではガリファ・ダヴレトカモヴァが学んでいる<sup>21)</sup>。

新方式学校は短期間のうちに地域住民の共感を得た。宣教師ボブロフニコフによると、カザン・タタールによって開かれたこれらの学校は、「大成功を収め、生徒でいっぱいになった」<sup>22)</sup>。この種の学校は多かれ少なかれ主要な集落のほとんどの開設されたが、男子校ばかりではなく、女性教師が教える女子校も同様であった。このようなマクタブの大半は、中央アジアの各地域に開かれた。しかし、バリトルドの見解によると、「タタールのマクタブが活動したのは、無論、村落ではなく、タタール移民が圧倒的に集中していた主要都市に限られていた。これら諸都市では、タタールの学校はロシアの学校よりもはるかに多くの成功を収めていたようだ」<sup>23)</sup>。

バルトリドによると、「タタールの新方式学校は、地域の住民に少なからぬ影響を与えていた」。いわく、1910年にトルキスタンには30のマクタブがあったが、そのうちの一つは1900年から新方式教育を始めていた。そこで教えていたのはタタール人であったが、さらに2校で新方式への移行が進んでいた。カザリンスクでは、新方式教育は1903年からタタールの学校だけではなく、カザフ人が教師を務めるカザフの学校でも行われていた<sup>24)</sup>。カパル市でも同様であった。さらに1913年にロシア外務省が集めた新方式教育に関するデータによると、1909年開校のママノフ・トゥルスベコフ兄弟の新方式マクタブが存在した。そこで教えられていたのは、タタール語、宗教、タタールの歴史、イスラームの歴史、算数、地理、動物学であった。教授言語はタタール語とカザフ語であった。教員は次の4名であった。(1) ガブドゥルガジズ・ムサガリエフ校長、アストラハン郡出身のカザフ人、カザンのアパナエフ校で6年間修学、担当はクルアーン、イスラームの歴史、タタールの歴史、ハディース学。(2) ムハンメド・ガッリー・イシャングリディン、カパル県出身のカザフ人、トロイツクの2年制ロシア・タタール校で修学、トロイツクの男子ギムナジウムが発行した教員資格をもち、読解、算数、地理、動物学を担当。(3) ベイセムバイ・ケデソフ、サルカン村出身のカザフ人、同地のマクタブを卒業、読み書き、算数、聖書の歴史、宗教を担当。(4) ファティマ・イシャングリディナ、カザフ人、ウファ市の第三モスク付属の女子マクタブを修了、女子部門の読み書き、算数、地理、裁縫を担当。同校には5つの学科があり、男子生徒103名、女子生徒26名が学んでいた<sup>25)</sup>。

バルトリドいわく、「タタール新方式学校はその出現から数年にして先住民の学校に

影響を及ぼしている。対照的に、1892年にある重要人物は、ロシア支配の27年は先住民学校に何の足跡も残さなかったし、その一つとしてロシア支配という新しく有益な秩序に浴することなく、その一つとして弱々しい啓蒙の光を浴びることすらなかった、と証言した<sup>26)</sup>。19世紀末から20世紀初頭にかけてタタール人は、「ムスリムに対しヨーロッパ式の教育を施し、ヨーロッパ文化に親しませることにおいて、ロシア人よりも優秀であった。この傾向は年々強まっていき、ついにはロシア人が気がついた時は、すでに相当程度進行した後であった<sup>27)</sup>。

トルキスタン地方の啓蒙運動は、帝政ロシアの懸念を呼んだ。ロシア外務省政務部の求めに応じて、シルダリア州の軍事総督は1901年に、「(ロシア中央部の)バフチサライとカザンの盛り上がり中央アジアのタタールにも及んでいることに違いない」と記している<sup>28)</sup>。同じ時代のセミレチエ州の軍事総督であったオスタシユキンも、「新方式学校教育の原理はセミレチエでは外来の現象であり」、「ヴォルガ・タタールやトルキスタンの先住民であるサルトラによって意図的に移植されたものであるが、残念ながら、彼らは熱烈な夢想家であり、新しい風に吹かれて、ある者はカザンやクリミアから、またある者はトルコからこの地にやって来ている」と書いている<sup>29)</sup>。

Ya.N-ovと署名している「ノーヴォエ・ヴレーミャ」紙の執筆者の一人は1910年に、先住民が皆、頑なに旧式のマドラサやマクタブで教育を受けていて、そこでの教育がクルアーンやシャリーアの枠を外れることがなかったかつての時代には、事態が直接的にロシア国家の関心を引くことはなかった、と記している。「しかし、最近になると、旧式のムスリム学校と並んで、新式の学校が現れるようになっていて、それは一般教育的な科目を含むより広範なプログラムを備えている。もちろん先住民のムスリム学校の中には口先だけより最適な教育を目指すとするものも残っていたが、残念ながらこれに対してはカザン・タタールが十分対抗していて、彼らの故郷であるタタールスタンにおいても、トルキスタンにおいても、ムスリムの自己決定に関する啓蒙者の役割をすでに演じていたのだ<sup>30)</sup>。同じ著者によると、まさにカザン・タタールの発案と直接の参加によって1909年に「ムスリム進歩協会」の規則が制定され、ムスリム子弟の教育が課題とされたと考えられている。いわく「この規則の原案は、ムスリム版国民教育省の創設と、カデット(ロシア立憲民主党)風の決まり文句で言えば、教育行政を教育業務から外すことを意図していたが、地域官庁からは支持されなかった。そのためかえって、先住民学校や新方式学校の教師や指導者に政府のコントロールが全く及ばなかったので、まさにカザン・タタールこそがサルトの子弟の教育に決定的な特徴を施したのだ<sup>31)</sup>。

1909年の報告でトルキスタン総督のサムソフは、「地域住民の先進的な者たちはヴォルガ・タタールとともに、いわゆる新方式マクタブを広めようと努めている。そうした学校では発音理論による学習が行われていて、旧式のマクタブやマドラサにはな

かったような科目、例えば、現代地理や算数などが教えられている」と指摘している。「それに加えて、かつ、最も重要なこととして、こうした科目を教えることはすなわち、いくつかのデータが示す通り、明らかに分離主義的で偏狭な民族的な性格をもつ思想を植え付けることに他ならない」。したがって、こうした学校を野放しにしてはならない。さもなければ、「パンイスラーム主義のみならず、パンテュルク主義やパンアジア主義の温床になりかねない」とサムソノフは憂慮していた<sup>32)</sup>。

トルキスタン地方における啓蒙運動の拡大について、ロシア政府はこれを「好ましいもの」とは考えず、1900年に「その影響を食い止めるために」十分な対策をとるよう提案した。啓蒙運動の影響を断ち切るために旧式学校を支持し維持することが推奨された。フェルガナ州の軍事総督の見解によれば、「我々が保護者の立場を維持し旧式学校を旧態にとどめておくことが、二重の利益をもたらす。第一に、あたかもムスリムの伝統を保存しそれを好む老人たちを保護するかのように振る舞う我々に住民の共感が寄せられる。第二に、空虚だが壮大なイスラームの聖戦よりもむしろ危険な革新思想の拡大を遠ざけることができる」<sup>33)</sup>。シルダリア州の軍事総督は、「ガスプリンスキー式の教育を掲げた初級学校の開設申請を唆す動きがある時は、開校を望む人物がロシア人教師によるロシア語科目の導入に賛成する場合にのみ許可を与える」よう提案した。「そのようなやり方により学校内部のコントロールが我々の手に委ねられるのだ」<sup>34)</sup>。のちにこの提案は多くの新方式学校の運営に取り入れられるようになり、地域言語をある程度使え、政府の手先としてロシア国家の利害を守るという自分の役割をよく理解している教師が任用されるようになった。1902年にトルキスタン総督（ニコライ・イワノフ）は総司令官に、新方式学校があるすべての地域で教育内容と教師に対する最も厳しいコントロールが行われたと報告した。1909年にはトルキスタン総督（サムソノフ）が、前任者であるミシュチェンコが“新しい風と新しい流れ”に関する課題を説明するために、地域の軍と官の代表から成る特別委員会を組織したと述べている。委員会のメンバーによって策定された対策としては、①ムスリム住民の中の偵察ネットワークの組織、②住民のための通訳者による「破滅的な影響」を阻止するためだけでなく、トルキスタン地方の行政官に地域住民とその文化習慣の特性を理解させるために行われた（行政官養成のための）東洋諸語、歴史、地理、ムスリム法学の授業の実施、③宗教学校および、いわゆる先住民の新方式学校に対する東洋学専門の特別調査官による実質的なコントロールの適用、④地域内のロシア式先住民学校の増設などがあった。隠密の偵察者たちは、ムスリム社会の「多様な分野の最も傑出した知識人や宗教人たちに食い込む」ことが求められた。総督府内部に特別部署を設け、「ムスリム特有の問題に関するあらゆる文書を集めるとともに、ムスリム地域の主要な新聞や雑誌のあらゆる記述から情報を収集するムスリム学の特別部局を設置する」ことが計画された<sup>35)</sup>。この部署が集めた資料は数百巻におよび、タシケント市中央図書館に「トルキスタン集成」の名前で保存されている。

1911年7月1日にトルキスタンで新しい規則が導入されたが、それによるとマクタブの教師は生徒と同じ民族出身の者でなければならないとされた。これにより「パンイスラム主義の温床」の精力的な撲滅が始まった。具体的な状況については、「ヴァクト」紙が伝えたボブロフニコフの記事の要約に描かれている：1910年12月28日にコーカンド市第三警察署の署長が、ノガイ<sup>36)</sup>のムガッリム（教師）たちを呼び、その前で国民学校の調査官の公的な命令文を読み上げた。それによると、タタール（つまり、ロシア中央部出身のムスリム）は地域のマクタブで教育に従事する権利を持たないとされた。マクタブで教えるべきなのは、サルトかサルト方言を解するロシア人であるとされたのだ<sup>37)</sup>。命令文を読み終えると、署長は彼らに署名を求めた。このようにして、1911年1月をもってロシア行政の命令によりトルキスタン地方のタタールのマクタブは閉鎖されるに至った。1913年11月に、フェルガナ州を巡察していた国民学校調査官は、同州の新方式学校は無許可で開設されていて、「当初はこうした学校の多くで教師がタタールであったものの、後には法的基盤のもと、これらの学校での教育活動は厳格に禁止された。タタール人教師が一掃された後は、教師はサルトばかりとなった」と伝えている<sup>38)</sup>。ロシア行政の命令により閉鎖されたコーカンドのタタール学校についてはボブロフニコフが、「こうした学校が閉鎖された後に新しい学校が現れるのは遅かった。なぜならば、サルトの教師は不足していて、かつ、既存の教師ですらタタール人教師のやり方を模倣したに過ぎないことが多かったからである。にも関わらず、ロシア行政に咎められながらも新方式学校の拡大が止むことはなく、しばし停滞したに過ぎなかった<sup>39)</sup>。

中央アジアにおけるカザン・タタールの教育活動の禁止は、ロシアのすべてのムスリム出版物によって伝えられた。そこで指摘されたのは、タタール・マクタブの閉鎖により「トルキスタンの新方式学校が存在しなくなった訳ではなく」、「禁止措置が学びたいという希望を挫いたのでもなく」、この措置はまったく「サルトとタタールの接近を阻止しようという願望をその課題として示したに過ぎず」、それは逆に「両者の緊密な一体化を促した」ということであった<sup>40)</sup>。

このようにして、地域の学校で働くことを禁じられたタタール人教師は、タタール学校でのみ働くことができた。しかし、タタール学校の多くで学んでいたのはタタールの子弟ばかりではなかった。ポリシヨイ・トクマク村のタタールモスク付属の新方式学校「エクバル」では、1913年に117名が学んでいて、そのうちタタールが33名、サルトが48名、カシュガル・サルトが4名、ダウンガン〔訳注：回族のこと〕が13名、「キルギス」が13名いた。プルジェヴァリスク市のタタールモスク付属の新方式マクタブでは、タタールが77名、「キルギス」が28名、ダウンガンとサルトがそれぞれ24名学んでいた。ヴェールヌイ市の新方式女子マクタブでは、90名中、タタール69名、「キルギス」9名、サルト9名、その他ムスリム系3名が学んでいた<sup>41)</sup>。

帝政政府を悩ましたのは、新方式学校の拡大だけではなかった。1900年にトルキスタン総督はロシア外務省に宛てて、「新方式教育の学校以外にも、タタールに見られる新しい動きとして、各地の都市にタタールの慈善団体と読書室の開設や文学イベントの開催、サンクトペテルブルクやモスクワの大モスクへの寄付勧誘などが進んでいる」と書いた<sup>42)</sup>。バリトルドによると、権力の命によりタタールの新聞を発行停止にし、教師と生徒は同じ民族の出身であるべきというあの例を見ない命令によりタタールの新方式学校がごく短期間だけ休校にすることは可能だった。もっと難しかったのは、ムスリム慈善団体への対策の法的根拠を求めることだった。なぜなら、「タタールがこうした団体を作った目的は単に慈善だけではなく、ムスリム人民の連帯思想を浸透させることにもあったからである」。1909年にタシケントにあったタタール大商人の代表機関のもとで活動していたこうした団体の一つについて触れながら、ある学者は「間違いなくこの団体はタタールの影響下に作られたものである」としている<sup>43)</sup>。

19世紀後半にすでにトルキスタンでは人形劇団が活動していた。90年代に最も人気があった劇中主人公の一人にタタールの町医者 of バトゥルシン博士がいた（バルトリドは1893年に彼のことを知っている）。人形劇であれ、人間が演じるものであれ、演劇は通常、断食月が冬季に当たる時にこの月の夕に催され、多くのロシア人が訪れた。バルトリドによれば、70～80年代を背景に「ロシア人の総督や県の役人までもが描かれた。こうしたことは、おそらくは官憲の要請によりじきになくなった」<sup>44)</sup>。

「ナ・ルバージェ」紙の記者は、1909年の96号で「タシケントのタタール演劇」という記事で、「すでに昨年からの町のタタール知識人の間では、ヨーロッパ式の劇場を建設するという構想が出されていた。そこでのタタール語による公演は、ヨーロッパの文化全般、中でも演劇芸術に対するムスリムの偏見と先入観の厚い壁に初めて風穴を開けるという目的をもっていった」<sup>45)</sup>。しかし、「この魅力的な構想」は懐疑派のせい（と記者は考えるのだが）、「残念ながらこの時は実現されなかった」。ゆえに1月31日土曜日の公演が世間を沸かせ成功を収めると、「かのタタール知識人たちには励みとなり、演劇の夕べに対する反対派を打ち負かし、ムスリム信仰の宗教的な清浄さを保つという観点から見て演劇が無害であることを示すことができたのだった」。この記者が指摘するように、ヨーロッパ人は商業ホールの劇場に集まった観衆の四分の一に満たなかった。公演は「最初の劇」と銘打たれていた。公演に参加したのはアマチュアの演者たちであったが、「すべての演者が愛好家として初めて演劇の舞台に立ったにも関わらず、舞台芸術としてとりわけ複雑で思想性を備えたとも言えない作品ではあったが、一致協力して淀みなく演じ切ったのであった」。記者は、劇の内容を詳細に描き分析しながら、出演者であったフサイノフ、シャムスッディノフ、ムハメドシン、アルスラノフ、ウミドフらの演技を評している。アマチュアの演技が満員の観衆の好みに合ったことは、「鳴り止まない拍手と一度ならぬカーテンコール」が証明していた。トルキスタンのタ

タール知識人の活動と彼らの「高潔な努力」を讃え、「彼らの最初の成功」を祝いながら、記者は「私たちは、タタール知識人の啓蒙運動にパンイスラーム主義や分離主義や他の惨事が起こる危険性を見るロシア化論者の言い分に完全に賛同するわけにはいかない」と書いている<sup>46)</sup>。

トルキスタン地方のムスリム住民の覚醒に対しては、タタールの出版メディアによる影響も見られた。バリトルドいわく「二年間（1906～08年）にわたってトルキスタンで発行されていたある進歩派の日刊紙は、完全にヴォルガ・タタールによるものだった」<sup>47)</sup>。ボブロフニコフによると、トルキスタンのムスリムは自前の出版社を持たず、完全に「外来の、中でも圧倒的にタタールの文献によって教養を培っていた」<sup>48)</sup>。

シルダリア州の軍事総督は1901年に、地域の書籍市場では新方式関連の文献に大きな需要があり、それは主に「タルジュマン」紙の購読の形であったが、それを広めたのがトルキスタン地方在住のタタールであり、彼らは主に通訳官として公務に就いている人たちであった、と伝えている。「同紙は既存の購読者を通じて相当数のサルトの中にも新規購読者を獲得していたが、彼らは新聞を読み終わるとそれを別の者に与えたりするのだった」。これ以外にも、同紙は、主としてタシケントに住むタタール知識人による通知書によっても広められた<sup>49)</sup>。「タルジュマン」以外にトルキスタンで大きな人気を集めたタタールの定期刊行物には、「ユルドゥズ」、「ヴァクト」、「ウリフェト」、「イデリ」などがある。

フランス語から訳された「イギリス領インドの現地住民による出版」（1909年）という記事でE. S-vと署名した著者は、「この10年で我々の学校で教育を受けたムスリムの一部が、現地ムスリムを啓蒙する目的でいくつかの外国語（そのほとんどがタタール語）新聞を創設したことは確かである」と書いた。著名な宣教師イリミンスキーの弟子を自称するこの著者は、名のあるムスリム新聞は啓蒙を目指したものであると考えていた。「これらは皆、筋道立っていて注意深い人には十分明らかだが、時には上手にその目指すところを隠して行われていた。ムスリムとムスリム組織の活動は最優先の掲載事項であり、タタールの編集者諸氏もそうした情報を惜しみなく提供していたが、政府や地域官庁からは時にロシア語出版に対しては見られないような批判を浴びたりもした」。著者の考えでは、「間抜けな異人種〔訳注：帝国内のロシア人以外の住民のこと〕たちにいくら優しく接しても、難しい判断を迫られるだけではなく、決して良い結果に至ることはないだろう」。ロシアの支配下にある広大な東南部にはムスリム住民が多く住み、「そこではタタールの活動が大変目立っていて、間違いなくイスラームの色合いを帯びていた。その動きはキルギスのステップ<sup>50)</sup>にも及び、キルギスの遊牧民たちをイスラーム化し、シルダリアの岸辺でかの「聖なるブハラ」がある南からのイスラームの流れと合流したのだった（「聖なるブハラ」とは、コーカサスで多くのロシア軍の血を流したミュリディズム〔訳注：戦闘的なスーフィズムの一派〕のカジ・ムッラー師や

シャミル師が贈った名である)』<sup>51)</sup>。

帝政政府の憂慮は無駄ではなかった。彼らの認識では、地域住民向けの書籍やパンフレットの発行がロシア人によってなされるのでないならば、「ロシア国家の利益とはかけ離れた課題や方向性をもつタタールの出版活動によって行われている」<sup>52)</sup>。「ロシア・ムスリムの保守性」という記事（1908年に「サンクトペテルブルク・ヴェードモスチ」紙に掲載）の著者であるシャフタンチンスキーによれば、要は、タタール人の出版社がしなくてはならなかったのは、ロシア語の書物をタタール語に翻訳することである。なぜならば、ムスリムにとって有益で必須でもある多くのことは常にロシア語文献に書かれていて、ごく自然に彼らの文化教養の源となっているからである。著者は、ロシアの教養に関するタタールの使命をはっきりと示している。「裕福で教養ある層がムスリム社会を構成し、ヨーロッパ思想が広まることを期待しなくてはならない。ロシア・ムスリムの世界観が欧化されれば、それは必ず近隣のムスリム諸国にも及ぶであろう」<sup>53)</sup>。

19世紀末から20世紀初頭にかけてのトルキスタン地方における帝政政府の反タタール政策は、我々の観点からは、大きく言えばロシアで二つの世界的な宗教・哲学的文化（ロシア文化とイスラーム）が対立し、そのどちらもが優位を争っていたような状況によるものであった。民族・宗教的かつ文化・習慣的に異なる文明をもつ現地人民の文化とかなりの程度の社会組織の低迷は、経済的であれ、文化的であれ、あらゆる社会生活の領域においてタタールを好ましくない競争相手と見ていた帝政政府の利益にかなうものであった。帝政政府は、ロシアのムスリム社会に地位向上につながるトルキスタン地方の経済的・文化的発展には関心がなかった。ゆえに、この帝政ロシアの新しいムスリム植民地は原料供給地かつ生活用品の市場にとどまる運命とされたのだった。

地域の文化生活に対するタタールの影響を制限するために、帝政政府は数多くの措置をとった。それらは概して、ロシア帝国におけるムスリム社会の統一と連帯を阻止するためであり、実際にトルキスタンの文化的発展をかなり停滞させた。しかし、政府によるあらゆる妨害にも関わらず、タタールは19世紀末から20世紀初頭にかけてトルキスタン地方でかなりの影響力を保持し、社会生活のあらゆる分野での発展を助けたのである。

#### 原注

- 1) Gafurov B.G. *Istoriya tadzhikiskogo naroda*, Moskva, 1955, S.428.  
[ガフーロフ『タジク民族の歴史』モスクワ、1955年、428頁]
- 2) Tam zhe. [同上]
- 3) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.31, ed.khr.123, 123 ob.  
[ウズベキスタン共和国国立中央文書館、ファンド1、目録31、保存単位123、シート23裏面]
- 4) Bartol'd B.B. *Istoriya kul' turnoï zhizni Turkestana*, Leningrad, 1927, S.134  
[バリトルド『トルキスタンの文化生活史』レニングラード、1927年、134頁]
- 5) Bobrovnikov N.A. *Sovremennoe polozhenie uchebnogo dela u inorodcheskikh plemen*

- Vostochnoi Rossii*. —Pg. 1917. S.26.28. [ボブロフニコフ『ロシア東部の異人種における教育の現状』サンクトペテルブルク, 1917年, 26・28頁] (サルトとは公文書におけるウズベクの名称である)
- 6) Musl'mane i Rossiia//Turkestanskii sbornik. —T.542. —S.42. [ムスリムとロシア, 「トルキスタン集成」, 第542巻, 42頁]
- 7) Gasprinskii I. *Russkoe musul'manstvo. (Mysli, zametki i nabliudeniia musul'manina)*. Simferopol', 1881.—S.40. [ガスプリンスキー『ロシアのイスラーム (あるムスリムの考え, 覚え書き, 観察)』シンフェロポリ, 1881年, 40頁]
- 8) Bartol'd B.B. *Istoriya kul'turnoi zhizni Turkestana*, Leningrad, 1927, S.136-137. [バリトルド『トルキスタンの文化生活史』レニングラード, 1927年, 136~137頁]
- 9) Gubaeva S.S. *Naselenie Ferganskoi doliny v kontse XIX — nachale XX vv.* —Tashkent, 1991. —S.114. [グバエヴァ『19世紀末から20世紀初頭にかけてのフェルガナ州の住民』タシケント, 1991年, 114頁]
- 10) Bobrovnikov N.A. *Russko-tuzemnaia uchilishche, mekteby i medresy Srednei Azii*, Sankt Peterburg, 1913, S.41. [ボブロフニコフ『中央アジアのロシア式先住民学校, マクタブ, マドラサ』サンクトペテルブルク, 1913年, 41頁]
- 11) Bartol'd B.B. *Istoriia izucheniia Vostoka v Evrope i Rossii. Izde-e 2-e. Lektsii*. L., 1925. —S.252. [バルトルド『ヨーロッパとロシアにおける東洋研究の歴史』第2版・講義, レニングラード, 1925年, 252頁]
- 12) Tam zhe. —S.140. [同書, 140頁]
- 13) Tam zhe. [同上]
- 14) Bobrovnikov N.A. *Russko-tuzemnaia uchilishche, mekteby i medresy Srednei Azii*, Sankt Peterburg, 1913, S.89. [ボブロフニコフ『中央アジアのロシア式先住民学校, マクタブ, マドラサ』サンクトペテルブルク, 1913年, 89頁]
- 15) Bartol'd B.B. *Istoriya kul'turnoi zhizni Turkestana*, Leningrad, 1927, S.147 [バリトルド『トルキスタンの文化生活史』レニングラード, 1927年, 147頁]
- 16) Tam zhe. [同上]
- 17) Bobrovnikov N.A. *Russko-tuzemnaia uchilishche, mekteby i medresy Srednei Azii*, Sankt Peterburg, 1913, S.86 [ボブロフニコフ『中央アジアのロシア式先住民学校, マクタブ, マドラサ』サンクトペテルブルク, 1913年, 86頁]
- 18) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.31, ed.khr.943, ll.50-51 ob. [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録31, 保存単位943, シート50~51裏面]
- 19) Tam zhe. — Ll. 33-44 [同上, シート33~44]
- 20) Tam zhe. — Ll. 33-33 ob. [同上, シート33~33裏面]
- 21) Tam zhe. — Ll. 33 ob. - 51 ob. [同上, シート33裏面~51裏面]
- 22) Bobrovnikov N.A. *Russko-tuzemnaia uchilishche, mekteby i medresy Srednei Azii*, Sankt

- Peterburg., 1913. S.80.  
 [ボブロフニコフ『中央アジアのロシア式先住民学校, マクタブ, マドラサ』サンクトペテルブルク,1913年,80頁]
- 23) Bartol'd B.B. *Istoriya kul'turnoi zhizni Turkestana*. Leningrad, 1927. S.137.  
 [バリトルド『トルキスタンの文化生活史』レニングラード, 1927年, 137頁]
- 24) Tam zhe. [同上]
- 25) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.31, ed.khr.343, ll.37-38 ob.  
 [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録31, 保存単位343, シート37~38裏面]
- 26) Bartol'd, B.B., *Istoriya kul'turnoi zhizni Turkestana*, Leningrad, 1927, S.138  
 [バリトルド『トルキスタンの文化生活史』レニングラード, 1927年, 138頁]
- 27) Tam zhe. —S.136 [同書, 136頁]
- 28) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.31, ed.khr.123, l.38  
 [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録31, 保存単位123, シート38]
- 29) Tam zhe.—L.32 ob. [同上, シート32裏面]
- 30) Zabytaia okraina//Turkestanskii sbornik. —T.542. —S.36. [忘れられた地方, 「トルキスタン集成」, 第542巻, 36頁]
- 31) Tam zhe. [同上]
- 32) Vsepoddanneishei doklad turkestarskogo general-gubernatora o polozhenii Turkestarskogo kraia v 1909 godu. —B/m. —S.15-16.  
 [1909年のトルキスタン地方の状況に関するトルキスタン総督の報告, 15~16頁]
- 33) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.31, ed.khr.123, l.23-23 ob.  
 [ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録31, 保存単位123, シート23~23裏面]
- 34) Tam zhe. —L.39. [同上, 39頁]
- 35) Vsepoddanneishei doklad turkestarskogo general-gubernatora o polozhenii Turkestarskogo kraia v 1909 godu. —B/m. —S.14.  
 [1909年のトルキスタン地方の状況に関するトルキスタン総督の報告, 14頁]
- 36) トルキスタン在住のヴォルガ・タタールは「ノガイ」と呼ばれることが多かった（これについては、以下を参照）。  
 Bobrovnikov N.A. *Russko-tuzemnaia uchilishche, mekteby i medresy Srednei Azii*. Sankt Peterburg, 1913. S.77.  
 [ボブロフニコフ『中央アジアのロシア式先住民学校, マクタブ, マドラサ』サンクトペテルブルク, 1913年, 77頁]  
 Bartol'd B.B. *Istoriya kul'turnoi zhizni Turkestana*. Leningrad, 1927. S.105.  
 [バリトルド『トルキスタンの文化生活史』レニングラード, 1927年, 105頁]
- 37) Bobrovnikov N.A. *Russko-tuzemnaia uchilishche, mekteby i medresy Srednei Azii*. Sankt Peterburg, 1913. S.77.  
 [ボブロフニコフ『中央アジアのロシア式先住民学校, マクタブ, マドラサ』サンクトペテルブルク, 1913年, 77頁]

- 38) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.31, ed.khr.943, l.65  
[ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録31, 保存単位943, シート65]
- 39) Bobrovnikov N.A. *Russko-tuzemnaia uchilishche, mekteby i medresy Srednei Azii*. Sankt Peterburg, 1913. S.77.  
[ボブロフニコフ『中央アジアのロシア式先住民学校, マクタブ, マドラサ』サンクトペテルブルク, 1913年, 77頁]
- 40) Tam zhe. —S.79. [同書, 79頁]
- 41) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.31, ed.khr.943, l.144ob., 52ob.  
[ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録31, 保存単位943, シート44裏面, 52裏面]
- 42) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.31, ed.khr.123, l.12 ob.  
[ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録31, 保存単位123, シート12裏面]
- 43) Bartol'd B.B. *Istoriya kul'turnoi zhizni Turkestana*. Leningrad, 1927. S.165.  
[バリトルド『トルキスタンの文化生活史』レニングラード, 1927年, 165頁]
- 44) Tam zhe. —S.174. [同書, 174頁]
- 45) Tatarskii teatr v Tashkente//Turkestanskii sbornik. —T.502. —S.172.  
[タシケントのタタール演劇, 「トルキスタン集成」第502巻, 172頁]
- 46) Tam zhe. —S.174. [同書, 174頁]
- 47) Bartol'd B.B. *Istoriya kul'turnoi zhizni Turkestana*. Leningrad, 1927. S.138.  
[バリトルド『トルキスタンの文化生活史』レニングラード, 1927年, 138頁]
- 48) Bobrovnikov N.A. *Russko-tuzemnaia uchilishche, mekteby i medresy Srednei Azii*. Sankt Peterburg, 1913. S.88.  
[ボブロフニコフ『中央アジアのロシア式先住民学校, マクタブ, マドラサ』サンクトペテルブルク, 1913年, 88頁]
- 49) Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistana, f.1, op.31, ed.khr.123, ll.12, 39.  
[ウズベキスタン共和国国立中央文書館, ファンド1, 目録31, 保存単位123, シート12・39]
- 50) 「キルギスのステップ」はカザフスタンのことを指しているものと思われる。カザフは当時の公式な場ではキルギスと呼ばれていた。
- 51) Tuzemnaia pechat'v Angliiskoi Indii//Turkestanskii sbornik. —T.520. —S.130-131. [イギリス領インドにおける現地人の出版活動, 「トルキスタン集成」, 第520巻, 130~131頁]
- 52) Bartol'd B.B. *Istoriya kul'turnoi zhizni Turkestana*. Leningrad, 1927. S.135.  
[バリトルド『トルキスタンの文化生活史』レニングラード, 1927年, 135頁]
- 53) Kosnost' russkikh musul'man//Turkestanskii sbornik. —T.455. —S.186. [ロシア・ムスリムの保守性, 「トルキスタン集成」, 第455巻, 186頁]